
親友証書

ジェリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親友証書

【Nコード】

N3988Y

【作者名】

ジェリー

【あらすじ】

大阪府出身の童顔転校生と、東京育ちの運に恵まれない主人公。お互いはひよんなことから距離を縮めていき、いつしか掛け替えのない親友になる。

一緒に笑って、泣いて、悩んで、怒って、また笑って。

『親友って本当にいいものだな』

思春期の二人に繋がれた、強い絆のお話。

はじめに

『親友とは、仲の良い気を許した関係』

一般的且つ簡潔に言えばこういう風な、似たような言葉が浮かび上がるのではないだろうか。国語辞典の言葉を借りるなら、『極めて親しい友』だそうだ。

でも一体親友の定義って何だろう。どこからが親友でどこまでが友達の境界線？

人それぞれ価値観が異なるから、一概には決められないけれど…でも、そんな難しいことじゃないんだ。

親友と聞いてパツと頭に思い付く奴。そいつが親友だと俺は思う。皆もきつとそうなんじゃあないかな。

あれこれ考え出して導き出した答えじゃない。大切なもの程直感的に浮かぶ、これ俺の持論。

俺がこれから振り返ろうとしている過去は、そんな俺の大事な親友の話だ。

1、雨と一緒に転校生

中学二年

六月の八日辺りを過ぎた頃、めでたくも東京はついに梅雨入りをしたと、テレビのお天気お姉さんが白々しい笑顔で言っていた。確かに最近どうにも湿気の所為か、先日買った漫画本のページが緩やかにウエーブを描いていると思った。古本屋で売れなくなったら困るからと、俺はその漫画本の上に更に大量の漫画本を乗せて矯正を図った。

朝だというのにどんよりと暗い雲で空は覆われ、重たい教科書とどこか憂鬱とした気持ちを鞆に詰め込んで、相も変わらず振り続ける雨の中傘を差して登校し、ジトジトした空気の中をクラスの前までジメジメとして、学ランの下に着ているポロシャツに汗がへばりつき始めた頃、というかそんな時期に、転校生がやって来たのだ。

何処から湧いたのか、学校では転校生の噂が一週間程前から流れていた。噂は日を追う事に具体化していき、情報としては性別は男で関西出身、それも相当な問題児だったそうで、だからこちらに転校して来たのだという結論にまで至っていた。関西出身でしかも問題児というワードが並べられれば、あまり良いイメージが湧かないのも仕方ないかもしれない。東京の人間に関西人は少々刺激が強すぎる（単なる俺の偏見だけ）。

特に、前日に担任の口から「明日転校生がウチのクラスへ来る」

という正式な情報を発表された俺達のクラスは、それは本当に大騒ぎだった。まだ噂の段階ではどのクラスかまでは断定できていなかった為、俺達のクラス以外はホッと安堵の息を吐いていたに違いない。

そして転校生がとうとう俺達のクラスに加わる日。まだ一限目も始まっていないというのに、皆は吐き気を催しているのではないかというくらい青ざめた顔色で、噂の転校生の登場を待っていた。

「どうした浅原、顔色悪いぞ」

担任の河野先生が、席替えで運悪く一番前、しかも真ん中の席になっちゃった俺にそう言った。

ちなみに河野先生にはバタフライという強烈なあだ名が付いていて、何でも昔の先輩がイタズラ半分で給食に出て来るはちみつマーガリンを、はちみつだけ取り除いて河野先生のチリチリ頭にそっと塗った所、午後の体育の授業時に蝶々が蜜を吸いに来たという伝説がある。真相はわからないけれど、生徒達の間で代々受け継がれているらしい。

だけれどそんなことを思い出しても今は可笑しくもなんともなく俺は大丈夫ですと短く答えて、作り笑いを浮かべた。けれどきつと苦笑いになってしまっているだろう。

皮肉にも先月の末に行われた交流を深める為の遠足の時よりも、クラスにはこれ以上ない一体感が生まれていた。

陽気でいつも豪快に笑う担任はとことん鈍い為、クラスの変化には気付かない。

重苦しく、胃がキリキリと痛むような空気の中、カラカラと教室

のドアがゆっくりと開いた。視線がそちらに釘付けになる。

皆はきつと祈る様な思いで見ていることだろう。俺だってそうだ。

そんな願いの込められた視線の先に現れたのは、紛れも無い転校生だった。

ただ、少し呆気にとられたのは俺だけではないだろう。クラスに充満していた負のオーラが、すうっと溶けるようにして和らいだのだ。皆の様子がまるで共有し合っているかのように流れ込んで来る。しかし何故そういった反応を示しているかというところ。転校生の風貌が、あまりにも想像と掛け離れていたからだろう。

背丈は百六十あるかないか、俺とあまり変わらない。横も細身で頭髪は茶色っ気があるけれど地毛だろう。ここの中学は軍隊並に規則に厳しいので、もし染めていたとしたら黒に戻されるはずだ。

というか、それよりも。体格より何より意外なのはその顔立ちだ。実に可愛らしい、というか子供っぽいのだろうか。女子が好きそうなアイドルの顔というよりは、田舎で育った神童と呼ばれていそうな感じ。うーん、伝わらない。所詮まだ中学二年のこの俺が、子供っぽいなんて言える立場じゃないけれど、本当にそう思うのだ。教壇の真ん中、先程まで担任が居た場所に転校生が立つ。

「大橋智也です。よろしゅうお願いします」

その声を聞いた瞬間、俺の体に衝撃が走った。皮膚の表面がびりびりとして、まるで医療器具のリハビリなんかで使われている電気のあれみたいな感覚だった。ただただ生の関西弁に感動した。テレビの漫才やバラエティーでしか聞いたことのない関西弁を、今確かにこの耳で聞いたのだ。

けれども声音に愛想は一欠けらも感じられない。表情もどこか冷

めていて仏頂面だ。子供っぽいのにどこか子供らしくない不思議な印象を受けた。

現時点では問題児かどうか判別しかねるが、少なくともなりふり構わずケンカをおっぱじめそうな人間には見えない。それとも別のケースの問題児なんだろうか。何も問題児イコール乱暴で規則を守らない不良だとは限らない。学校へ来ない、つまり不登校の生徒も学校側にとっては問題児だろうし、懇談の時にオール1の成績表を渡される生徒も問題児だ。

何にせよ、俺達のクラスの平和が乱されることは多分ない、と思う。

「だーっはっはー！ 大橋い、ここは関西人らしく、一発ギャグでもやっつくか？」

河野先生改めバタフライの陽気過ぎて清々しい大声が、隣の教室にまで聞こえるんじゃないかというくらい響いた。

「ばかやろう！ 俺は思わず拳を握り締めた。空気が読めないのは毎度のことながら、しかし今このタイミングでそれを無茶振りするだろうか。転校初日の挨拶なんて、今後にどれだけ左右されることやら……。」

転校生も流石にこれにはまいったようで、「堪忍して下さい」と口の端を引き攣らせていた。

残念だー本場のギャグがなんたらかたたらとバタフライは激しいリアクションをしながら言うと、まあ今度見せて貰うさと勝手に納得して、転校生を一番後ろの席に座らせた。つまり俺の行の最後尾だ。

こうして転校生は、六月のいやーな暗ーいジメツとした時期に、バタフライの迷惑極まりないテンションとは違って空気の読める平

和な俺達のクラスに加わったのだ。

2、基本的には他力本願

いつも平凡で変わりない日常を過ごしている俺達生徒にとって、転校生が来たつてのは相当なビッグイベントだと思う。

普通やたらに質問したり、学校や勉強の事を教えたり、『分からないことがあったらいつでも言ってね！』みたいなお決まりの台詞が聞こえて来たつていいはずなのに。

今現在、そのような変化は一切ナシ。皆、今日もいつも通りの日常を送っていた。

「浅原、お前転校生に話し掛けたりした？」

俺の肩に手の平をぽんと乗せてそう言ったのは、元同じチームメイトである野球少年の安田だ。俺は小学生の頃から地域のクラブで投手をしており、安田はその時の相方、つまり捕手だ。安田はシニアへは行かずに中学の部活へと入っただけけれど、俺は野球を辞めてしまった。何も野球が嫌になつた訳じゃない、寧ろ大好きだ。練習は辛いけれど、試合はやっぱり楽しい。じゃあ何故好きな野球を辞めたのかというと、それは俺の小学六年生の最後の試合で起きた悲劇にまで遡る。

俺は元々喘息持ちで、医者からはあまり激しい運動はするなと忠告されていたが、幼い子供が元気よく体を動かす事を誰が止められようか。それに俺の場合そこまで重症な喘息ではない。症状は極端に軽い方だ。ただクーラーの風を直接浴びて夜を過ごすと、確実に体調は悪くなる。練習はキツかったけれど、いつも何とか乗り越えて来た。

そんな俺が記念すべき小学校生活最後の試合でやってしまった。投球動作の途中、膝から崩れるようにしてマウンドで意識を失い、

倒れてしまったのだ。それを日陰の保護者席で見ていた母さんは真っ青になっただけでなく、生きた心地がしなかったそうだ。

急遽試合は中止となり、俺は救急車に乗せられて病院のお世話になった。

幸い意識は直ぐに戻り、起きた時には腹減ったなあと呑気な事さえ考えていたのだが、とうとう母さんから野球禁止令が出されてしまった。

俺は猛抗議をしたが超が付くほど過保護な母は少しも聞く耳を持たず、俺の野球人生は十二歳にして幕を閉じた。

そんな俺を氣遣ってかどうか、安田は昼休みによくキャッチボールに誘ってくれる。二人だけではなく他にも野球部が数人程居る。部活で嫌でもするだろうに、皆いい奴だ。

けれど以前のような、小学生の頃のような関係ではなくなっていた。他の仲間と一緒に野球をする安田は、もう俺の知らない安田だった。

分かっている、俺が一方的に疎外感を感じているだけだ。楽しかったはずの昼休みは、いつの間にか少し窮屈な時間にさえなってしまった。それが単なる自分のひがみであるか理解はしているけれど、頭で納得できることはなかった。

だが安田がいい奴な事には変わりはない。俺は少し背の高い安田を見上げた。

「いやあ、関西弁に思わず感動しちゃったよ」

「あ、俺も俺も。ホンモノだーみたいな」

「俺一番前で聞いてて、鳥肌立つちゃったよ」

「うはは、感動しすぎだったの」

安田のしゃがれ声が愉快に響く。風邪を引いているわけではない、練習の声出して枯れたのだ。

「つーかさ、デマだったのかね、あの噂は」

やんわりと核心を避ける物言いだったけれど、安田の言いたい事は十分に伝わった。つまりそう、問題児だという噂だ。俺はうーんと首を捻る。

「どうだろなあ。少なくともイメージとは大分違った」

「確かに。俺さあてつきり眉毛とか落としてて、我なんぼのもんじやい！ とか言いそうな大柄な奴かと思ってたから」

それはドラマの見すぎだと思っけれど。口には出さずに心の隅で軽く突っ込んで笑っておいた。剃りたてだという安田の五厘が眩しい。

「けどまあ、見事に皆話掛けないな」

安田は息をはあつと吐きつつ転校生を見た。俺も続いて視線を向ける。関西人だから皆ビビっているのだろうか、イヤ、思春期の好奇心がどうしたって勝るだろう。それなのに見て見ぬフリをしているのは 何だか、人を寄せ付けないような凄みのあるオーラが滲み出ているからだろう。所謂、一匹狼的なそれに当たる。

「まあ、時間が解決してくれるかもしれないな」

安田はそう言って自分の五厘頭をチョリチョリ掻いた。俺も手を伸ばしてチョリチョリしたかったけれど、それはぐつと堪えた。自

分も坊主の経験があるので分かる。人から坊主頭を撫でられると何だか惨めな気持ちになるのだ。触っている人は気持ちいいだろうが、触られている方はたまったもんじゃない。思春期の坊主は物凄くデリケートなのだ。

時間が解決してくれる　本当にそうだといいいけどなあ。

早く転校生が皆と打ち解けられたらいいなあと思いつつも、自分から話し掛ける勇氣はないので、他力本願で事の経過を見守る事にしました。

3、孤立した六列目の席

まずはお知らせがひとつある。何と、俺の席が一番後ろに昇格したのだ。言っておくけれど席替えをしたわけじゃない。自慢じゃないが俺はあまり運には恵まれていないので、大抵は貧乏くじを引く。では何故そんな俺が一番後ろの席を得たのか。それは他ならぬ担任、バタフライからの要望だった。

朝の登校時に服装チェックの為、校門の前で仁王立ちしているバタフライに呼び止められた。一瞬服装違反か？とも思ったが、俺は制服を着崩してはいないし、頭髮だつてワックスをつけていない。どうやら他の用事らしく、俺は手招きされるがままに用件を伺った。

「浅原、お前自分の席を変わってやってくれないか」

席？ 誰と？ 疑問に思いながらも、バタフライの話の続きを無言で促した。

「実はなー、最近目が悪くなったらしくてなー、一番後ろの席じゃあ黒板が見えないって言つて来たんだ」

だから誰となんだよ。朝という事も若干イライラしつつも顔には出さずに堪えた。一応生活指導の先生兼任担任であるので、悪いイメージは与えておきたくはない。だがいつも大事な部分が抜けているバタフライの会話と発言には、毎回神経を使わなくてはならなかった。

しかし待てよ。今、バタフライは何と言った？

「え、先生。一番後ろの席とですか？」

「そうだとも！ 浅原は視力両目ともAだし、何より一番前の席だしな！」

何という幸運！ ついにこの俺にも運が巡って来たか！

俺は即座に承諾して、人生にして初めてとなる最後尾の席をゲットした。

運が悪い悪いとは思っていたが、いやいやそんな事はない。神様だっけきちんと日頃の行いを見てくれているんだ。そうだとも、少しくらい俺にいい事が巡って来たって罰なんか当たるもんか。

幸先のいい一日の余韻に浸っていると、ひとつ、重要なことを聞き忘れていたのを思い出した。

「あ、先生。俺の席って誰と交換するんですか？」

「んん？ 中平だよ」

……え、中平？ 綻んでいた笑顔が凝固する。

って、あれ、ちよつと待て、ちよつと待てよ。それってあれだな。俺の席の左隣りの一番後ろだよな？

この学校のクラスの席順は大体六行五列で構成されており、平均して一クラス辺りの人数は三十人を過ぎるか過ぎないくらい。

俺達のクラスは転校生がやって来たので三十二名となり、その分三行目と四行目に余ったふたつの席が六列目にぼつんと孤立した形で存在する。漢字で表すなら凸の状態と言っている。凸の突き出ている箇所が六列目だ。

それでまあ、俺の席は黒板と向かい合って立ったとして、右から数えて三番目にある。つまり三行目の一列。そしてその左隣、四行目の最後尾が中平の席だ。だから俺はその席とチェンジをする

訳になる。

そこまで考えると、俺は体から物凄い勢いで汗が噴き出して来るのが分かった。

噂の転校生の席は、今現在の俺の席の一番後ろにある。つまり三行目の最後尾。という事は、俺が中平と席を交換すると、四行目の最後尾になるわけだから……。

俺はどうやら決断を急ぎ過ぎてしまったようだ。目の前の餌にあっさり釣られてしまうなんて。

だってそうだろう。俺は今日から、孤立した六列目　しかも相方が転校生という気まずい雰囲気味わわなければならないのだから。

即決に快諾しておいて、やっぱり嫌ですなんて今更言えない。

「だーっはっはー！　そうかそうかありがとう！　大橋と仲良くやれよー！」

バタフライが俺の肩を豪快に叩く。普通に痛い。力加減ができないんだろうか。

俺はがっくりとじんじんする肩を落としながら教室に入った。六列目の席には中平の存在はなく、一番前の席に当然のように座っていた。了承も得ていないのに堂々と本を読んでいる姿が憎らしく、後でこっそりしおりの位置を変えてやるうかと思っただ。

俺が黒板の前をわざと通り過ぎると、中平は本を閉じて慌てて立ち上がり話し掛けて来た。

「あ、浅原くん」

「何？」

「席、変わってくれてありがとう」

何でこいつ確信してんだよ。危うく舌打ちをしそうになった。

恐らく中平の様子を見るに、バタフライが「だーっはっはー！大船に乗ったつもりでいるー！」とか何とか言っただろう。全くあの自信はどこから湧いて来るんだ。

「ああ、別にいいから。気にするなよ」

「本当にごめんね」

中平は、はつきり言ってクラスの中で浮いている。外見的にも内面的にも、友達ができにくいタイプだ。外見に関しては明らかに太りすぎ。これじゃあミートボールというあだ名がつけられても可笑しくはない。おまけに性格は目茶苦茶内気で、人と話すのもあまり得意ではなさそうだ。悪い奴ではないと思うけど……。

「僕、あの人ちょっと苦手なんだ」

「転校生の事？」

「うん……」

まあ、得意ではないだろうな。未だにどういう奴なのか分からないし、いつも仏頂面だしなあ。けど本当に子供っぽい顔なんだ。何か小さいチンピラみたいで、少し可笑的い。

「僕……、昨日あの人にお金をせびられたんだ」

「えっ」と驚いたのは俺だけではない。皆いつの間に話を盗み聞きしてたんだというくらい、驚きの声がぴったり重なった。チームワーク良すぎだろう。幸いにも転校生はまだ来ていない。

「何々どういう事？」

「やっぱり不良？ 問題児？」

「詳しく話せ中平！」

人が一気に吸い寄せられるように密集して、俺と中平は囲まれた。いきなりの反応に中平は体型に似合わずおどおどしているが、俺も衝撃的なニュースの続きを催促したい。

「あ、え、えっと……あの……」

中々話し出さない中平に、皆は痺れを切らしていた。これが本当の話なら、いよいよ本物の小さいチンピラだ。

「あの、お金くれて言われて……それで、怖くて……家に帰って、河野先生の携帯に掛けて……」

「まさか、転校生にカツアゲされたなんて言っていないよな？」

俺は直ぐさま確認した。そんな事がバタフライにバレたら、ヤツは何をやらかすか分からない。確かにバタフライはバカだけれど、怒ったら相当恐いのだ。

「い、言っていないよ……目が悪くなったから……席変えて欲しいっ

て言った」

……よ、よかった。ホツと胸を撫で下ろす。危うくクラスの平和に亀裂が入り、戦争になる所だった。

「そっか、そうだったのか。まあ中平も大変だったと思うけど、浅原も頑張れよ」

「そうね、浅原くん頑張ってる」

「ファイトだ浅原」

口々に皆が俺を見て言った。

ちよつと待ってくれよ、何だよ皆、こついう時こそチームワークの見せ所なんじゃないの？

用事が済んだら脱兎の如く元通りの配置に着くクラスメイト達。

だからそのチームワークを俺への思いやりに少しくらい使ってくれよ……。

今は何を言っても虚しいだけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3988y/>

親友証書

2011年11月16日01時29分発行